

最優秀賞

施設に入居して

渋川市 伊藤 由美子（73歳）

人は誰しも生涯を通して健康で生き生きと人の世話にならずに過ごしたいと願っているものです。私ももちろんその一人でした。

ところが思いがけない事が私の身に起こりました。姑を見送り、夫に先立たれ、その上パーキンソン病に罹ってしまいました。体力・気力共に徐々に衰えて行く現実の前で、独居生活が困難になつてきて施設に入居する事となりました。

施設生活が始まりました。さて、入居して見ての事です。ここでは全ての生活が受け身で進められています。時間が来れば「10時のおやつですよ。」「お昼ですよ。」「3時のおやつですよ。」と声を掛けてもらい、配膳された食事を頂くのみの生活。そこは自分から考えたり、努力したりする事を一切要求されない生活の始まりでした。入居してまもなく、施設の職員に送迎して頂き自宅近くの歯科医院に通院する日がありました。私が「自宅がすぐ裏に有るので、花を切ってもらいたい。」とお願いました。すると「今回は歯科医院の通院送迎が目的なので。」と断られました。「なんでこんな近くの所なのに。」と庭に咲き乱れる紫陽花の花を思い浮かべながら不満の思いが胸につもって、夜、息子に電話で訴えました。息子は「それはおかあの考えが違うよ。一人の人の我儘を許可すれば次の人も……と次々に許可をしなければならなくなるよ。」「ああそうかそれが集団生活の規律と言うものなのだ。」と私自身の認識の甘さに気付かされました。

やがて施設の生活のリズムに慣れてくる中で「して頂く。」という視点で生活全体を見渡すと「感謝すること。」がたくさん見えて来ました。そのきっかけになったのは夏祭りの行事でした。職員の皆さんが浴衣を着て模擬店で私達を楽しませてくれました。フィナーレは職員による盆踊りでした。「昨夜、遅くまで練習したんですよ。」と額の汗を拭いながら話してくれる職員の笑顔を見て、人手不足で職場の大変さを利用者側から見ても感じているだけに「私たちの為にこんなに頑張つて下さって。」と思うと胸に熱いものが込み上げて来ました。私はその翌日から頑張り表を作成し「歩行」「立ち上がり。」「指のマッサージ。」「スクワット。」の項目を日付の横に実行出来た回数を書き入れ、前向きに取り組み始めました。

私の頑なな心を開かせてくれたのは、毎日の関わりの中で「安全な生活の確保。」をしてくれた職員の方々の日々の援助活動によるものだと思います。人は一人では生きていけません。まして何らかの障害を持つている私達は尚更の事です。失われた機能を嘆くより今ある命を大切に思いたい。そして、職員や入居者同士又、外部からの時折来てくれるボランティアの方々との関わりの中で自分なりに喜びや希望を見つけて生きて行けたら素晴らしい事だと思えます。